

このたび、書学書道史学会の大会の会場校をお引き受けして、充実感を味わわせていただいたと同時に、多くの方にすいぶんご不自由をおかけしてしまったのではないかと、不安を感じている次第である。

そもそも私は三〇年ほど前に、神戸大学教育学部国語科の書道教員として着任したのであるが、その後一〇年あまりを経てより、大学改革の嵐が吹き荒れることになった。結局、教育学部と教養部が合体して教育学部の学生定員四二〇人を使い、新たに発達科学部（学生定員二八〇）と国際文化学部（学生定員一四〇）の二学部を立ちあげ、教員もこれに準じてシャフルすることで落ち着いた。国語科は自ずから廃絶となり、私は国際文化学部地域文化学科アジア・太平洋文化論講座に配属され、中国社会文化論を担当することになった。さらには、四年後に修士課程で中国文化論、六年後には博士課程でコミュニケーション科学専攻の応用コミュニケーションを担当することになった。

論・文字文化形象論と、勝手にポストが決まつていった。まだ足りない。三年前に学部が大学院化し、学部も再編成。学部では現代文化論講座の芸術文化論・文字文化論、博士課程（前期・後期）ではグローバル文化専攻・現代文化システム系・芸術論コースとこれまで勝手に決まつていった。自分の専門分野が、本人不在のまま変わっていくのである。「働けど働けどわが業績は実らず、じっと手を見る」などと、のんびりしたことなど、とうてい言わせてくれる場ではない。わが国際文化学部は学生の「国境を超えて、文化を横断し、活動する知性」を育てるなどを売りにするが、教員に対しても、いやはや鍛えることと鍛えること。それでも、その中でいすいとやつしていく人がいくらでもいるのだから、まったく恐れ入つてしまう。

かく、くだぐだと述べたのは、これまでの会場大学と違い、私どもには書もしくは書道を専攻する学部学生が一人もおらず、からうじて修士に一人、博士に一人の院生がいるだけ。はたしてこの三人で二日間の大会の屋台骨が支えられるのかどうか、はなはだ不安なままに当日を迎えたということを告白したかったのである。ただし、この院生は二人そろって、パソコンは専門技官並みの能力者。これについては、じつに心強かつた。パソコンさえ動けば、あとは発表者にがんばつてもらうことでなんとかなる。

しかし、いきなりそれは甘かつた。暖房システムの鍵は預かっていたのだが、どうしてもそれではシステムの入っているボックスが開かない。このまま開かなかつたら、この寒いさなかにはたしてどういうことになるのか、身震いがする。鍵そのものには反応があるのである。このまま開かなかつたら、この寒いさなかにはたしてどういうことになるのか、身震いがする。鍵そのものには反応があるのであるのに開かない。頼みとなるのは守衛しかない。土曜日だが、出勤態勢になつていてるか。いたとしても、この広いキャンパスの巡回でもしていたら、つかまえようがない。私は祈るような気持ちで守衛所に走り、守衛さんがいることを確かめると、あたかも後光が

第19回大会の会場校を経験して

魚住 和晃



第 16 号

平成20年(2008)12月15日発行

編集・発行
書学書道史学会
会報委員会

東京都渋谷区桜丘町29-35
〒150-0031 美術新聞社内
TEL(03)3462-5251(代)
FAX(03)3464-8521(代)

さして いる ように 感じ られた。

守衛さん が笑つて い う。「ああ、鍵をまわしたあと、コツクを右に上げて くだ さい。そ うし たら 開き ますよ」。そ うだ った。そ のとき ようやく、事務員から そ う教え られて いたのを 思い 出した。私に痴呆がはじまつていて、それを忘れて しまつて いたのだ。年はとりた くないものだが、守衛さん にすんなり会えたことは、本当に 幸運だ

つた。その他、時間 を知らせる リンガ ないやら、弁当 対策 やらで、ずいぶん 事務局をはらはらさせたことだろ う。
ただし 私も 言い分——。つまり、これぐらいの 小勢でも、まあなんとかやれるものだ と いうことである。大学の 態勢や 規模など気になせず、どんどん会場校に名乗りを上げて、いい経験をされることをおすすめします。

(学会 諮問委員)

第19回大会研究発表・司会者報告

国内局大会運営委員会

かの 判別 可能性、が 応答された。

◆発表①古典筆墨書跡における模本作成技法の解析—コンピュータ画像処理による分析方法の開発と展開（和田彰）

従来、古典の複製本が双鉤填墨であるか否の判別は、鑑定者の経験的認知によつて行われてきた。本発表は、肉眼からの視覚情報を筆墨書跡における墨色の感知と捉え、その微細な濃淡を識別する方法を提示し、模写技法を科学的に実証しようとする企図で行われた。

はじめに、模本に関する記述を六朝・唐・宋の各時代の文献資料もとに検討し、その作成技法について概観している。続いて、現代における模本作成技法の理解について述べ、肉眼による鑑定では十分な根拠を得がたいことを示し、コンピューター画像処理による分析方法の提示と説明が行われた。

発表後の質疑においては、(1)平成十七年既報告の魚住論文との差異、(2)分析対象とした国版資料の妥当性、(3)掲模か臨模（一筆によるもの）

解析に用いられたコロタタイプ影印本や宣伝用カラーパンフレットは、「遊目帖」自体の模写技法に関する考察に向けてはなお検討の余地があるが、本発表で提示された研究方法の開発は、

最先端の研究として期待される。今後は、文理共同での研究開発、文献学や従来の鑑定方法との相互検証を交えながら、分析対象や方法の応用可能性をも見込んでいけるであろう。

(司会者・萱のり子)

◆発表②董其昌有紀年論書に見る王羲之觀（尾川明穂）

あつた。

本発表は、董其昌の有紀年論書に着目し、これらを編年し再構成することで、その書法觀の変遷をたどろうとする試みである。発表者は、「画禪室隨筆」などは後人の編纂したものであつた。

これに対しても、質疑では有紀年論書そのものの資料としての妥当性に対する疑義がだされた。董其昌論書の分析にあたつては、彼の書画作品分析と同様の慎重さが求められるであろう。この点に関する更なる考察を期待したい。

(司会者・下野健児)

◆発表③西川寧による金文を素材とした書作
品について〈深田邦明〉

本発表は、没後二〇年近くになる西川寧先生が残した多くの業績のうち、書作家としての業績、とくに中国の古代文字「金文」を素材とした書作品に着目し、来源、背景、特質などについて述べ、その先駆的な偉業を評価しようと試みたものである。発表は以下の項目順に行われた。

一、西川寧の金文書法受容とその背景

- (1)少年期における金文書法受容とその背景
- (2)青年期以降における金文書法受容とその背景

二、西川寧による金文を素材とした書作品の特質

ただし、発表の時間配分に関する事前の準備が必ずしも十分でなかったため、当日の発表では前半部分にほとんどの時間が費やされ、主眼となるはずの後半部分に関する言及はごく一部にとどまつたことが惜しまれる。

発表された部分に限って言えば、父西川春洞の金文書法や当時の中國における時代状況などが先行研究を踏まえてよく整理されており、また、これまで意外と注目視されなかつた事柄についても言及があつた点で評価できるが、やや事実の羅列に終わつた感があり、発表者自身の分析は乏しかつたように思われる。

西川先生のいう「書は文字という素材を通じて、自分の核心にすわつたところをあらわすもの」が、金文という特殊な素材を通して具体的

にどのように表現されたのか、という問題についてのさらなる追究の深化を期待したい。

(司会者・中村伸夫)

◆発表⑤明治三十三年「小学校令」以前の仮名統一と諸問題〈高城弘一〉

本発表は、明・陳鑑旧藏蘭亭序が、元・陸繼善模写本と酷似することに着目し、(1)両本の伝来を探り、(2)両本及び神龍半印本・張金界奴本との細部にわたる比較から両本の原帖の性格を推測するとともに、(3)両本の系統に位置付く幾つかの刻帖を比定するものである。

既に会報附載のレジュメ集で指摘されるように、発表者からは、(1)陳鑑本が陸繼善の模写本の一つである可能性が強く、陳鑑本の伝来に関する王世貞の説には齟齬があること、(2)両本は神龍半印本系統との緊密な結びつきを示しつつも、一部に張金界奴本に共通する特徴を備え、神・張とは独立した系統の原帖に基づくことが示唆されること、(3)高島コレクション本など数種の刻帖が陳鑑本に基づき、來禽館本・鬱園齋本も同系であること、などが報告された。

司会者からは、明治十一年一月、榎原芳野の編で文部省から公刊された『文芸類纂』巻二・字志下を指摘。同書では平仮名字源とその略化過程が示されており、「え」のみ別体(変体仮名)として扱われていることから、同三十三年までの二十年ほどの間に、平仮名が「江」から「え」に転じたかと結んだ。また、江戸期には仮名の字源を誤ったものが多いことも付言した。仮名の字源を誤ったものが多いことも付言した。が進展することを期待したい。(司会者・森岡隆)

会場から質問・意見が出されず、窮屈に立たされた司会者が、陳鑑本における米芾跋の来歴について質すとともに、関連の先行研究を若干紹介した。

唐模の「古相」を種々の伝本の系統から見通そうとする発表者のアプローチは、いたつて正攻法であり、今後更に諸伝本へ視野を広げた研究の進展が望まれる。

◆発表⑥錢瘦鉄とその周辺・谷崎潤一郎を中心

に〈柿木原くみ〉

本発表は、かつて日本の文化人達と多くの交流を持った中國の篆刻家・錢瘦鉄の印刻を通して、とりわけ谷崎潤一郎の書簡や隨筆などの調査から、これまで論ぜられることのなかつた谷崎潤

一郎と錢瘦鉄との関わりを考察したものである。錢瘦鉄については、すでに発表者のレジユメに記すように、昭和十一年三月一日刊の三省堂『書苑』創刊号に顧問及客員一六名中、唯一中国人としてその名を連ねるとの紹介があり、さらに当該創刊号へ「中華民国の習字法」と題する一文を寄せるほどの人物で、当時の日本書道界における知名度は卓抜していたことが知れよう。

本発表は、これが書道界のみにととまらず、当時の文化・芸術界にも及んでいたことを初めて証左し、指摘するものである。かつて漱石や鷗外といった日本近代の文豪達が、多くの自用印をこぞつて所持していたことは周知のとおりである。当時の文芸作家達にとって、その所作の証に印刻の存在は極めて重要なツールであったことは論を持つまでもない。

しかし、これまで書学書道史の立場から、これを取り上げて本格的に言及を試みようとした論はほとんど見あたらない。その意味でも、今回の柿木原氏の発表は、日本近現代の文豪作家における印刻に対する意識の所在を解き明かす画期的な研究といえよう。ただ、今回の発表では、いささか錢瘦鉄の印刻の説明に重点が置かれ、また質疑応答ももっぱら書人としての錢瘦鉄に向けられた感があり、核心に迫ることでのぎなかつたことが残念でならない。核心部分は、是非とも研究誌の投稿に期待したいものである。

(司会者・鈴木晴彦)

◆発表⑦開通褒斜道刻石銘文再考 〈萩信雄〉

『中国書道全集』卷一において、郭栄章氏は「開通褒斜道刻石は補刀はされていない」との立場をとっている。萩氏は、この再考の中で郭栄章氏の補刀否定説に対し、補刀されている事実を、拓本の新旧から比較検討し、さらに論証したものである。具体的には七行目の「治」が

「治」の字に補刀され、旧拓では十六行目の「九千八」の下に「横画を見るだけであったが、「二」が「百」の字となり、「百」の下に「四」

の字が補刻され、やみくもに補刀されてしまったと論ずるのである。さらにその後の補刀によって、栄文も誤り、「漢代石刻集成」では七行目を「部の掾の治級・王弘・・・」と読んでいるが、これは「掾の治級・王弘・・・を部す」と読むべきだと主張しているのである。質問においては一件だけで「郭氏は常に刻石を実見で

きる立場にいながら、なぜ補刀について否定するのか」との問い合わせして、萩氏は「郭氏は拓本の旧拓を見る機会に恵まれなかつたためだ」との意見であった。拓本の新旧から栄文について新しい知見もあつた。が、さらにもう一步踏み込んで漢代の行政機構の部署の役割についての考証も行えば、さらに深まつた発表であつた、と思われる。

(司会者・大橋修一)

四、両帖はともに嘉永七年の『玄々菴珍藏録』

(大谷大学文芸学会『文藝論叢』第三八号
収録の水田紀久氏による資料紹介がある)

に見える家刻本の一つである。

新資料の書誌情報提供の意義は認められるが、発表にあたつては、さらに諸跋を通して知られ、いざさか錢瘦鉄の印刻の説明に重点が置かれ、また質疑応答ももっぱら書人としての錢瘦鉄に向けられた感があり、核心に迫ることでのぎなかつたことが残念でならない。核心部分は、是非とも研究誌の投稿に期待したいものである。

(司会者・澤田雅弘)

は、京都東寺の坊官をつとめて、飛驒法眼に叙せられ、田邊飛騨とも呼ばれる。篆刻家としては、とくに中年以降に熱中した陶印制作で知られ、『玄々菴印譜』を残している。また書は、栄無幻や武元登登庵に師事して、太師流の能者であった。

本発表は、

氏が入手された玄々の自書自刻の

『般若波羅密多心經』古詩十九首両帖についての概要報告で、要点は次の四つにまとめられる。

一、両帖はともに隸書で、『玄々菴印譜』自序の隸書に先行する、二十代の筆跡である。

二、跋のほか、親交のあった賴山陽の跋(全集

収録とは異同が多い)や、秦鼎・佐藤一斎・篠崎松竹ら名家の跋が並ぶ。

三、自跋や諸家の跋には、玄々の書法観はもとより、当時の隸書觀に関する内容を多く含み、史料性が高い。

四、両帖はともに嘉永七年の『玄々菴珍藏録』

(大谷大学文芸学会『文藝論叢』第三八号
収録の水田紀久氏による資料紹介がある)

に見える家刻本の一つである。

新資料の書誌情報提供の意義は認められるが、

発表にあたつては、さらに諸跋を通して知られ、いざさか錢瘦鉄の印刻の説明に重点が置かれ、また質疑応答ももっぱら書人としての錢瘦鉄に向けられた感があり、核心に迫ることでのぎなかつたことが残念でならない。核心部分は、是非とも研究誌の投稿に期待したいものである。

◆発表⑧田邊玄々の自刻法帖をめぐって 〈鈴木洋保〉

江戸末期の能書家・篆刻家、田邊玄々(一七九四 or 一七九六~一八五八。名は憲、字は伯表)

近代以降に限つても、これまで上梓されてき

◆発表⑨近代以降の顏真卿の研究について 〈宮崎洋一〉

た顔真卿に関する論著及び図版集は、相当数にのぼり、多くの研究成果が積み上げられてきた。その内容は、顔真卿の書家としての一面のみならず、学者・政治家、あるいはその思想などの点からも論述されてきたが、これらの論著の目録については、必ずしも十分とはいえないなかつた。今回の宮崎氏の発表は、それらを内容の面から著書を中心して整理し、これまでの成果と今後の問題点などを考察したものである。とりわけ近代以降の論考は、「文集」が使いやすくなつてから研究が進んだ感があり、さらに影印された作品にばらつきがあることなどから、何をもつて顔真卿とするのかという点について今後さらなる研究が必要であると指摘した。

これに対し、二人の会員から質疑がなされた。杉村氏は、今回の分類の全体の枠組みとして世系表や訳注・解題なども加えるべきであると述べ、菅野氏からは、雑誌記事のさらなる検索が必要であることと、一九三〇年代の上海求古齋書局の影印が他社の影印とは異なる点に注意すべきであるとの意見が出された。

本発表の目録は、日中双方の顔真卿に関する論著・図版などを丹念に目配りした労作であるが、上述のようにまだ不足する部分もあるため、今後より一層の補充が期待される。

(司会者・横田恭三)

◆発表⑩書道学の文化財保存への対応に関する諸問題（安達直哉）
現在危惧される文化財保存への対応について、

問題点を挙げて提言を行う発表であった。発表者によれば、昭和四十年代までは書道学と文化財の関係は緊密であったが（たとえば『平家納経』修理への植村和堂氏の批判など）、昭和五十年代以降、文化財保存と調査の大転換が行われた結果、調査の上でも修理の上でも距離が生じ、このことが現在の書道学と文化財の関係における課題となつており、今後書道学が文化財に対していくかに対応すべきかが問題であるという内容であつた。

提言としては、(1)学問的考察の必要性としての「昭和五十年代以降の文化財保存・調査の転換の理解」、(2)書道学の問題としての「文化財保存・調査への積極的発言・相互理解」、(3)書道学の人人がより多く参加する「古文書を含めた書跡文化財を調査できる体制づくり」、の三点である。このように提言する背景には、優品のみを選択するやり方、現存の姿を尊重しない分類法、保存・修理に対する関心への意識の変化があり、また文化財諸機関において歴史学専攻者が増加する一方で書道学専攻者が減少する傾向にあること、さらにつきが国指定文化財書跡の指定傾向に影響を及ぼし、単体指定から一括指定が増加し、古筆などの指定が減少し、近世の古筆の分野まで指定が及ばない現状がある。

先ずは発表者の提言を重要な問題提起として受け止め、本学会としても対応を考えていかなければなるまい。

(司会者・河内利治)

◆発表⑪本阿弥光悦筆和歌巻の特徴—鶴下絵和歌巻を中心として（森岡隆）

「鶴下絵和歌巻」は、俵屋宗達筆と認定される金銀泥下絵の料紙に柿本人麿以下、三十六歌仙の名と和歌を散らし書きしたもの。日本書道史上「寛永の三筆」の一人である本阿弥光悦の代表作であり、慶長年間（一五九六～一六一五）、光悦芸術の絶頂期の作と考えられている。

本巻は下絵と書が見事に調和した作例として高く評価され、すでに書道史や美術史において位置づけられている。本発表では従来あまり論じられなかつた点について、具体的な指摘と提案がなされている。発表者は、光悦が無意識に本巻を制作したのではなく、優れた平安古筆などに見る書式をよく学び、また入木道の伝統を継承した能書による故実を踏まえるなど、充分な検討を加えた成果であると考察する。

例えば、(1)上の句と下の句を各々三角法に構成する散らし書きで上の句の行頭を高くする原則をとる点、(2)揮毫にあたり料紙に余白を残さない工夫（『才葉抄』）、(3)下絵の群鶴の目を避けて書した点（『心底抄』他）、(4)定家坂名遣いの交用、の五点に分けて解明する。

これらは「鹿下絵和歌巻」なども同様と見なし、光悦筆と伝える書の真贋鑑定の鍵になることを提示する。勿論、それには光悦書の基準作例との慎重な比較検証が伴うことが条件となることはいうまでもなかろう。今後、新たな光悦研究が期待される。

(司会者・古谷稔)

〈第5回学生・若手の会員による研究発表会〉発表者公募について 国内局

これまで四年間にわたり、学生・若手の会員で発表可能な人を推薦していただき、毎年

九月に研究発表会を開催してきました。今後は開催期日を六月～七月に変更し、発表者を公募することになりました。ふるつてご応募ください。

なお、応募者多数の場合は、レジュメによつて採否を決定します。

* 日時：平成21年7月5日（日）午後1時～
* 会場：未定（東京都区内の大学）

* 公募対象：満35歳以下、または大学院在籍者に限る。

* 発表時間：1人20分、質疑応答10分、合計

* メールアドレス：yokota@atomia.ac.jp

第4回学生・若手の会員による研究発表会報告

30分。P・Pなど機器の使用可。
* 締め切り：平成21年1月31日（土）
* 応募方法：電子メール。表題を「研究発表の応募」とし、住所・氏名・所属を明記し、発表内容の題目と要約（レジュメ）をワード文書で添付すること。文字数は600字程度。

去る九月二一日（日）、午後一時から日本大学百周年記念館を会場に、およそ50名の参加者を得て、第四回研究発表会が開催された。三名の大学院生による〈研究発表〉と、一名の〈会員による研究余話〉が予定通り実施され、質疑応答も活発に行われた。発表内容は次の通りである。

一、董其昌の有期年論書に見るその書法観

：筑波大学大学院 尾川明穂

明末書画壇の最高峰に位した董其昌は、「芸林百世の師」と称され、後世にも多大な影響を与えた。後人の編集になる『画禅室隨筆』には、董の理論が収録されているとされるが、尾川氏は『画禅室隨筆』の出典とみられる董其昌筆「行書論書画法卷」の記述の特徴から、彼の書法観の一端を探ろうとしたもの。北京の故宮博物院蔵「行書論書画法卷」が書風や本紙の内容から見て、董の真跡である可能性が高いことを確認した上で、その記述の特徴を考察した結果、『画禅室隨筆』に採録されたことによって、この記述が姿を変えてしまったと指摘。よって、董其昌の書法観の真意を知るための資料としては不十分であるので、董自らが記したものによって検討する必要があると結んだ。

先行研究を踏まえながら、綿密な検討を加えた発

表であった。（配布資料・B4で六頁）

二、近世の書に見る白居易の受容について ：日本大学大学院 中元雅昭

中唐の詩人・白居易の詩文集である『白氏文集』が近世にどのように受容されたかという発表である。『白氏文集』は、「風諭詩」「閑適詩」「感傷詩」「雜律詩」の四種に分類できるが、近世の詩壇に白居易の影響があつたかどうかについて考察してみると、林羅山・伊藤仁斎・服部南郭などの文集に言及したものが見受けられる。近世の書作品に関しては、松花堂昭乘・池大雅・巻菱湖・亀田鵬齋らがあげられるが、亀田鵬齋の場合は白詩の「閑適詩」を取り上げているところに特徴がある。近世の詩壇においては「感傷詩」と「風諭詩」が好まれ、「閑適詩」が等閑視されるという偏重が窺える。一方で、亀田鵬齋の「閑適詩」を用いた「詩卷」によつて、近世の『白氏文集』の受容の可能性が広がつたと指摘する。近世の詩壇と書作品に於て絞つて白詩の近世における受容を考察した点と指摘。よつて、董其昌の書法観の真意を知るための資料としては不十分であるので、董自らが記したものによって検討する必要があると結んだ。

（配布資料・A3で六頁）

三、西周金文における異形文字の考察 ：大東文化大学大学院 角田健一

西周金文にみえる異形文字について考察し、その要因について検討したもの。はじめに異形文字の定義とは、同一青銅器中にみえる同音同義の異なる構造を持つ文字をいうとし、その構造の違いを「反転」「配置」「接点」「画数」の四つに分類した。異形文字を有する青銅器（『殷周金文集成』中に収録されている五〇字以上の銘文を有する二五〇件の青銅器を対象にした）を四つのカテゴリに分類し、さらに早・中・晚期の三つに時代区分した。これらを白川静説をもとに断代を試みた結果、孝王期に異形文字が多く現れることがわかつたと指摘した。また、その出現要因としては①文字の確立性の不足②製作上の過程③美意識や芸術性の三点が考えられるとして述べた。質疑応答では、異なる構造とは、つまり字体の問題であり、字体と字体とを混同しないように注意すべきであるとの意見や、青銅器の剥削の仕方によつて微妙に変わることの問題も無視できないことが、當時の詩を心情的にはどのように捉えていたか、という角度からアプローチしてほしいとの意見が出された。

（配布資料・B4で二頁）

研究余話

題跋識語に見る翁方綱と李宗瀚

富田 淳

塩業で財をなした臨川の李氏一族の一人李宗瀚（一七七〇～一八三二）が、乾隆五十八年（一八一二）二十四歳で進士となつた時、六十一歳の翁方綱（一七三三～一八一八）はすでに『粵東金石略』・『兩漢金石記』・『蘇米斎蘭亭考』等を著し、卓越した業績を築いていた。碑版法帖の大收藏家・李宗瀚は、祖父以来の巨富を受け継ぎ、唐碑を中心とする名帖を次々と購求していったが、コレクションの形成にあたつて、斯界をリードする翁方綱の影響を少なからず受けているのは、蓋し当然のことであろう。

現存する李宗瀚コレクションには翁方綱が随所に識語を書き記し、翁方綱が李宗瀚に宛てた数々の尺牘にも、名品の所在を伝えその購入を促したり、李氏の所蔵する名帖の借用を頻繁に依頼したりするものがある。三十歳の年齢差を越えて、両者は翁方綱書学を補完し李宗瀚コレクションを形成するうえで、互いに欠くことのできない存在であった。

李宗瀚コレクションの中で、最も人口に膾炙しているのは、いずれも日本に現存する臨川の李氏四宝、すなわち隋・丁道護の啓法寺碑、唐・

虞世南の孔子廟堂碑、唐・褚遂良の孟法師碑、そして唐・魏栖梧の善才寺碑であろう。著者はこれまで折にふれて、臨川の李氏四宝を各所で紹介してきたが、正直なところ、実はそれが何れの資料に拠るものか、長い間その典拠を検しえないでいた。

李宗瀚が四宝を入手した順序は、四宝に書き込まれた翁方綱や李氏自身の識語から明らかである。李氏の四宝のうち、孟法師碑を除く三種に

は翁方綱の識語があり、その内容から、少なくとも翁方綱が識語を揮毫した時点で、それらの名帖は李宗瀚の所蔵であったことが分かる。以下、三種について翁方綱の最も早い識語を挙げると、孔子廟堂碑は嘉慶十二年（一八〇七）二月、善才寺碑は嘉慶十二年（一八〇七）三月、啓法寺碑が嘉慶十七年（一八一二）二月となる。一方、孟法師碑は李宗瀚の叔父蕙甫が道光癸未（一八二三）の百花生日、厚価をもつて李宗瀚のために購入したもので、翁方綱の歿後五年のことであった。

さて、李氏四宝の典拠を見出したのは、北京の国家図書館を訪れた時のこと、分館の古籍館に収藏されるコロタイプ本『臨川李氏静娛室四宝』においてである。同書は四分冊、各冊に刊記はなく、外題簽に『『臨川李氏靜娛室四宝』己巳五月耐廬景印。仏言題』とある。その一冊に、李宗瀚の文字を拓した以下の識語が付されていた。

臨川李氏静娛室墨宝。／隨丁道護啓法寺碑。／唐虞永興廟堂碑。／褚

河南孟法師碑。／魏栖梧文蕩律師碑。／隋唐秘妙。真則称丁。虞體／褚骨。魏空知名。得一已絕。／矧四難并。殊逾趙璧。不出／戶庭。道光癸未春。春湖題記。

ここにいう道光癸未とは道光三年（一八二三）。李氏四宝に李宗瀚が識語を記した時期は、孔子廟堂碑・善才寺碑・啓法寺碑の三種がともに道光二年（一八二二）、孟法師碑は道光癸未の百花生日というから、道光三年の二月十二日となる。

李宗瀚の伝記をひもとくと、李氏は嘉慶二十年（一八一五）からの十年間ほどを風光明媚な故郷の桂林で過ごし、その間、碑版法帖の整理に没頭していたらしい。翁方綱なき後、李宗瀚は天下の孤本を携えて郷里に帰り、名品を愛玩しては跋文を記し、さらなる孤本・孟法師碑を入手すると、都合四本を門外不出の名品として、李氏の四宝としたのである。

想 隨

黄賓虹故居のこと

中 村 伸 夫

彼の生涯を簡単に概観できるようになつてゐる説明パネルが設置された平屋の別棟である。

数年前からのことであるが、勤務校の仕事の関係で杭州にある中国美術学院を訪問する機会が多くなつた。この十月のはじめには単身で、十一月中旬にも五人のスタッフで学院を訪ねた。

仕事というのは、今春終了したC.O.Eプロジェクトのアンケート調査、

そして、昨秋からはじまつた学術交流協定の締結にかかる一連の交渉などである。毎回、公務上の所期の目的が達成された後、多少なりとも自由行動の時間ができるが、そんなときには必ず当地ゆかりの文人墨客に關わる記念館や故居などを見学することにしてゐる。何しろ杭州である。古来の著名な文学者や芸術家にかかわる見学施設には事欠かない。

つい先ごろの十一月の訪問の際にも、短時間ではあつたが、西湖北岸の棲霞嶺にある黄賓虹（一八六五～一九五五）の故居を訪ねることができた。

対金戦争に活躍した宋代の英雄的武将岳飛を祀つた「岳廟」の西隣に、棲霞嶺の頂上にまで延びるなだらかな小道が通つてゐる。当地で購入した地図にある通り、黄賓虹故居はその小道をしばらく登つた西側にあつた。建物は何の変哲もないごく普通の一階建ての石造りの家屋であり、質素この上ないたたずまいという点で、同じく西湖の北岸に近い龍游路に位置する沙孟海故居に通ずるものがあるよう思えた。

参觀できたのは、故居の一階のみで、黄賓虹が絵筆を執つた大きな机がある画室、いくつかの遺品が陳列された応接間らしき部屋、そして、

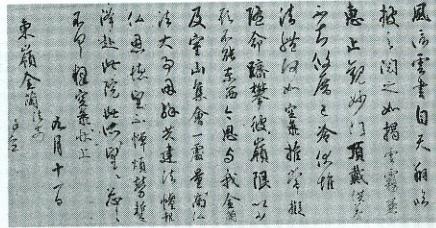
黄賓虹の山水画は、墨を重ねて黛綠を加えた濃密重厚な作風を特徴とする。「中華の大地、山の美ならざるは無く、水の秀ならざるは無し」とは彼自身の言葉であるが、その山水画はみずからの脚で深く山川に分け入り、刻々に変化して止まない内容豊かな自然の姿を、黒、密、厚、重の四語で形容される独特の積墨法に託して、生き物が氣を吐くがごとくに再構成したものであるといえる。

陳列遺品はすべて真跡ではなく水印による精巧な複製であつたが、まとめて何件もの画幅を目の前にして言いようのない迫力に圧倒された。多くはこの小さな建物の中で生活していた九十歳近い最晩年の作品であり、ここから歩いて十分ほどの孤山にある浙江省博物館が原画を所蔵している。

永きにわたつた上海、そして北京での生活に終止符をうち、黄賓虹がこの地に移り住んだのは、新中国成立の前年、民国三十七年、八十五歳の時であった。翌年の五月に杭州が解放されており、世情もようやく平穏をとりもどした頃から病没前五年ほどをこの建物で過ごしたことになる。老画家は毎日のように坂をくだつて西湖の北岸を散策し、湖面に反射する陽光をその大柄な体いっぱいに浴びながら、四季折々の風景をスケッチしたにちがいない。

故居の説明パネルには、彼が生涯にこしたスケッチの総数は数万をこえると書いてあつた。小さな机で新聞を読んでいた係員らしき中年の女性に、ここに住んでいた時のスケッチは今どこに所蔵されているのかを尋ねようと思つたが、「ブージータオ」と一蹴されそうだったのでやめにした。

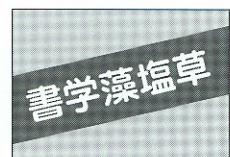
（学会副理事長）



①



②



此話二題

（）空海の書をめぐつて（）

岸田 知子

その一

空海が最澄に宛てた書状（「風信帖」）の第一通には末尾の宛名が「東嶺金蘭」とある。文中にも「我金蘭」とある（図版①右から七行目下）。

この「金蘭」の語は、「易經」繫辭伝の次のとこばに由来する。

二人同心、其利断金。同心之言、其臭如蘭。

二人の心が通り合つて同じになれば、金属を断ち切るほどの強さを持つ。心を通い合わせた者どうしのことばは、蘭のように芳しい香りを放つ。そこで、固く結ばれた芳しい友情を「金蘭之契」「金蘭之交」というようになつた。「蘭契」「蘭交」ともいい、良い友を「蘭客」ともいう。

空海は若いときの著作『聾瞽指帰』（のち『三教指帰』に改題）下巻においては「百年の蘭友」という語を用いている。百年も続くような蘭のようにかぐわしい友情で結ばれた友という意味である。

しかし、「金蘭」はあくまで親しい友情のたゞえとして使われるのである。「風信帖」の文面では、「東嶺の金蘭」は宛名であるから東の山に住む親しい友という意味であろうし、「我が金蘭」とともに最澄を指すことは明らかである。このように「金蘭」を友人そのものの意味で用いた例を他には知らない。空海独自の珍しい用例といえるのではないだろうか。

その二

大学院の授業で『三教指帰』を読んでいる。テキストは『定本弘法大師全集』を用い、岩波の日本思想大系他を参照しているが、『聾瞽指帰』真筆本の複製本（便利堂製）を前に広げて時折照合する。真筆本を見ることが、字句の確認というだけでなく、予想外の効果をもたらすものだと感じている。

たとえば、下巻に「作頌写懷曰」とあり、統いて四言二十句の詩が書かれている。もちろん刊行物では同じポイントの活字で組んであるのだが、真筆本で見るとここだけ際だつて字が大きく墨色も濃い（図版②）。この部分の内容はその前の文意をほぼ繰り返しているのであるが、頌詩として力をこめて書いたことがまさに目に見てわかる。下巻最後の「十韻詩」も大きな字になつていて。散文だけでなく詩も書けるのだぞとばかりの自信あふれる筆致に、若い空海の、当時の日本という枠内には收まりきれない才知のほとばしりを感じるといえおおげさだらうか。ともあれ、実物を（たとえ複製本であれ）見ることの大切さを改めて思い知られるのである。

視 点

臨書雑感

池田 利広

る。しかし、そうでなければ誰かに手本でも書いてもらわなければなりません。

先の何紹基の臨書のようになつてしまつだらう。

ある人から何紹基の作品を臨書したので批評してほしいと頼まれた。尺八の画仙紙にひと目で何紹基と分かる文字が三行に並んでいた。この人はそれなりに書法を理解しているのだが、その臨書作品は鈍重で生彩を欠いていた。線の形は似るが線質はほとんど何紹基とは思えない。起終筆でのスピード感の差、生動感あふれる筆画、そして今にもバウンドしそうな点などが、その作品には見えない。点画間の呼応はまるで無く、大きさに言えば、死の世界のように動きをまったく感じないのである。原因はすぐに判明した。それは、臨書の手本として使つた何紹基の作品が、図録からのコピーだったのだ。これでは何紹基の書を学べない。コピー用紙に写っているのは、何紹基ではなく、何紹基のミイラである。血の通つた肉筆の感じがまるで無いのである。そんな代物を臨書したのだから、何紹基に似るわけは無く、それどころか書の美・生命をも失いつてしまつたのである。

同様の理由で臨書が効果的に行われないケースに拓本を手本にした場合がある。ご推察いただけるであろう。拓本の白抜きの文字には、起筆や送筆などに質感の差が表れていないのである。その表出は書き手がイメージしなければならない。年季の入つた書の経験者であれば、独自の解釈でもつて潤渴、筆圧の強弱、運筆の速慢などを瞬時に判断し表現す

る。しかば、先の人の臨書は何紹基の作品に対して心打たれた結果あらわれた行為なのだろうか。何紹基の線に対する羨望、憧憬、敬意、愛慕などの感情によって生じた模倣行為なのか。恐らくそうではないだろう。それは、盲目的に評価の有る古典さえ書けば上達できるという機械的作業にも似た考えに依るものと思われる。だから、形さえあれば良く、質は無関心に放置されてしまつたのだ。コピーのトナーから墨線の妙味をつかみ取れることははないのに……。もし、その人に書の芸術性や書美の在り處を考える機会があつたならば、臨書資料の選別、臨書作品の姿はおおいに違つていたと思われる。「一豪に差(たが)へば、これを千里に失う」ことのないようにしたいものだ。

(学会理事)

総会・理事会報告

平成19年度会計決算報告書			平成20年度予算書		
	項目	金額		項目	金額
収入の部	個人会員会費	3,165,000	支出の部	個人会員会費	2,356,000
	団体賛助会員会費	650,000		団体賛助会員会費	600,000
	その他の収入	611,600		その他の収入	600,000
	前年度繰越金	4,406,409		前年度繰越金	5,628,639
	合計	8,833,009		合計	9,184,639
支出の部	編集局学会誌関係費	947,610	支出の部	編集局学会誌関係費	1,400,000
	同事典編集委関係費	0		同事典等改訂関係費	200,000
	同新編纂事業関係費	0		会報編集委員会経費	300,000
	国際局経費	0		国際局経費	300,000
	国内局大会開催経費	396,150		国内内局経費	600,000
	国内局普及委員会費	12,220		学術局経費	200,000
	研究局準備委員会費	0		研究局準備委員会費	600,000
	会報編集委員会経費	201,260		20周年事業特別会計	1,000,000
	事務局関係費	0		事務局関係費	200,000
	謝金手当費	0		謝金手当費	300,000
	会議費	255,130		会議費	400,000
	通信費送料	323,440		通信費	300,000
	交通費	249,780		普及広報費	100,000
	普及広報費	70,430		ホームページ費	200,000
	ホームページ費	105,000		印刷費	300,000
	印刷費	187,360		事務費消耗品費	200,000
	事務費消耗品費	179,540		事務管理費	200,000
	事務管理費	200,000		人件費	200,000
	人件費	19,200		予備費	2,184,639
	予備費	5,628,639		合計	9,184,639
	合計	8,833,009		合計	9,184,639

◆2008年度総会ひらく

去年11月29・30の両日、神戸大学で開催された「第19回(2008)大会」の冒頭、例年通り本年度総会が開催されました。総会は、河内利治常任理事の司会で、まず開催校の魚住和晃諮詢委員の開会の辞、古谷稔理事長挨拶に続き、萩信雄諮問委員を議長に選出して議事に入り、▽役員改選選挙結果報告(浦野俊則選管委員長)▽研究局設置会則改正案承認、並びに鈴木晴彦局長選任決定の理事会報告(萱原晋事務局長)▽19年度事業報告・会計報告(萱原局長)▽監査所見(浦野監事)▽編集局報告(中村伸夫局長)▽学術局報告(森岡隆局長)▽国際局報告(河内局長)▽国際大会準備委員会報告(大橋修一委員長)▽国内局報告(横田恭三局長)▽研究局報告(鈴木局長)▽会報編集委員会報告(柿木原くみ委員長)▽財務委員会報告(杉浦妙子委員長)▽20年度事業計画・予算案説明(萱原事務局長)などの各議案・報告等をいすれも満場一致で承認・可決し、すべての議事を終えました。この総会で、来年の「20周年記念事業検討委員会」の設置と、「20周年事業特別会計」に100万円の予算が承認されました。また、同検討委員会は常任理事会がそのまま兼担する形で、来年2月末ごろにも会議が持たれ、具体的な事業計画概要が固まる見通しです。会員各位のご協力をお願い致します。

事務局

談話室

米山没後百年展によせて 服部一啓

が開催されています。(2/15まで)
私自身を振り返ると、学生時代に米山の書と出会い(三輪田米山展・愛媛県美術館)、自らの方向性が定まりました。当時を想い返しています。

サンリツ服部美術館の名筆——仮
名と墨蹟展を開催して 峯岸佳葉

藤森大雅

ヨンには海軍、陸軍、軍医など出品者の所属が書かれ、表具には一部迷彩柄の生地が使われており、会場には軍服を着た現役の軍人の姿があるなど、一般的な展覧会とは異質の雰囲気。その中を見覚えのある顔が、同じ大学院の授業を受けている同級生が軍服を着て会場にいたのである。後で聞いてわかったのだが軍人の中でも書の協会に属している人が多く、同級生もその中の一人だつたらしい。また一つ勉強になつた。

秘のかかわった企画の中から、「米山没後百年展」は、「企画展1」伊豫豆比古命神社での「その人と書の魅惑」、「企画展2」愛媛大学図書館での「米山日記の世界」が開催され、記念シンポジウムも行われます。米山の多くの遺墨を参觀の上、さらに近郊の石文を散策できる本格的な米山鑑賞の絶好の機会です。あわせて米山顕彰会監修の刊行物が記念出版されます。(12/14まで)また、久万美術館では「三輪田米山没後百年記念 米山と松山の三筆」

今秋、私の勤務するサンリツ印刷美術館で、館蔵の平安朝の仮名と中国・宋元時代の墨蹟を中心に、書の企画展を開催した。平成七年に開館した当館は、仮名の優品を多數所蔵するが、二玄社の日本名筆選に未掲載の作品も多く、知る人ぞ知る存在ではなかつたかさて、書の展覧会は、一般受けが難しく、親しみやすいよう、「文字は

先日、中国人の友人に誘われ展覧会を参觀しに出かけた。案内のものと着いた先は中国革命軍事博物館。状況が理解できずチケットを手渡されるとそこには『全軍書法作品展』と書かれてあつた。その名称から予想されおり、全国区の軍人の展覧会で今回が

学会人事

◆第10期理事会諮詢委員
▽北海道・東北地区一大

- | | | |
|----------------------------------|---------------------|-----------------|
| ◆第10期理事会諮詢委員 | ○佐藤敦子(S42年)高校教諭 | ○(学)田野倉美貴(S60年) |
| △北海道・東北地区 - 大川寿美子・玉澤友基・辻井義昭、矢野千載 | ○桑原和洋(S61年) | ○(学)大村直子(S50年) |
| ▽関東地区 - 河野隆・長野秀章・宮沢正明・森常雄 | ○川内佑毅(S58年) | ○(学)後藤俊博(S58年) |
| ▽中部・北陸地区 - 押木秀樹・平形精一・増田孝 | ○赤澤智(S32年) | ○(学)林雲峰(1975年) |
| ▽関西地区 - 赤尾栄慶・魚住和晃・岸田知子 | ○遠藤昌弘(S34年)駒沢女子大講師 | ○(学)丹信良(1975年) |
| ▽中国・四国地区 - 東国恵、信広友江・萩信雄・松本仁志 | ○平田光彦(S48年)高校教諭 | ○(学)中村薰(S21年) |
| ▽九州・沖縄地区 - 荒金信治・神野雄一 | ○鳥塚浩(S39年) | ○(学)佐藤淳(S51年) |
| ○新入会員(H19.7~20.11) | ○細谷恵志(S27年)了徳寺大教授 | ○(学)井上絵理(S60年) |
| ○志民和儀(S47年) | ○藤瀬礼子(S49年)了徳寺大專任講師 | ○(学)中山理香(S60年) |
| ○(学)金子馨(S60年) | ○千葉理香(S56年)了徳寺大助教 | ○(学)猪又遙香(S60年) |
| ○(学)小田健資(S60年) | ○(学)林錦濤(1956年) | ○(学)内野朗子(S51年) |
| ○(学)高田智仁(S58年) | ○(学)奥平将太(S60年) | ○(学)奥平将太(S60年) |
| ○(学)池田憲亮(S59年) | ○(学)森勇翼(S60年) | ○(学)森勇翼(S60年) |
| ○(学)和田彩(S42年) | ○(学)高田智仁(S58年) | ○(学)高田智仁(S58年) |

編集後記

美男子 王澤友基 达士

- ◆夏のある日、久しぶりに浅草寺境内の亀田鵬齋揮毫碑「算子塚銘」をみて、その足で書道博物館の企画展「良寛、亀田鵬齋、小林一茶、そして不折」、江戸東京博物館の特別展「北京故宮書の名宝展」を鑑賞。一日がかりで書と下町を堪能しました。(亀田絵里香)

◆最近、書のパフォーマンスが流行っているようだ。超大作や大字を揮毫する光景をテレビや新聞で目にすることも多い。集団で一斉に揮毫したり、音楽に合わせて揮毫するというのが、ここの一〇年ほどの新しい取り組みらしい

◆今年は源氏千年紀。誘発されてか原文を繕くこと多々。名文に接し、つい誦じている。誦じてはじめて見えてくるものがあるようと思える。歴史的名筆の鑑賞についても然りではなかろうかと考えるが……。（山本まり子）

◆神戸大学の大会では六甲の山々の紅葉が見頃でとてもきれいだった。自宅の近くの六義園では紅葉のライトアップがされていたが、職場との往復に明け暮れ紅葉を楽しむ余裕もなかつたので、うれしいことだった。

が書の「アーチー」自体は決して目新しいものではない。その歴史的背景を探るべく、少しづつの日中の文献

○ 豊口和士(会員) □ 文教大学准教授
○ 土橋靖子(会員) □ 第四十回日展会員
賞受賞
○ 森岡 隆(常任理事) □ 筑波大学教授
昇任